

悲劇的なるものの復権

—— テリー・イーグルトンの『甘美なる暴力』をめぐって ——

酒 井 正 志

かつてはイギリスにおけるマルクス主義文学批評の第一人者とみなされ、現在では、広範囲の文化批評家として活躍しているテリー・イーグルトン Terry Eagleton が 2003 年に *Sweet Violence: The Idea of the Tragic* (Oxford: Blackwell) 『甘美なる暴力 悲劇の思想』 森田典正訳 (大月書店, 2004) を上梓した。本論ではこの著作を取り上げ、イーグルトンの批評の方法を探る。

マルクス主義文学批評は言うまでもなくカール・マルクス Karl Marx と共に始まる。その理論的基礎は彼が『経済学批判』(1859)の序文で規定した次の立場である。

人間は、生活手段を社会的に生産する際に、彼らの意志から独立した一定の必然的諸関係に入る。人間の物質的生産力の一定の発展段階に対応する生産的諸関係である。これらの生産的諸関係の総体が社会の経済的構造を構成して、真の土台となる。この土台の上に、法律的・政治的上部構造が立ち、社会意識の一定の諸形態が対応することになる。物質的生活手段の生産様式は、社会的・政治的・知的生活の全過程を制約する。人間の意識が人間の存在を決定するのではなく、人間の社会的存在が人間の意識を決定するのである。⁽¹⁾

イーグルトンは、ここでいう「社会意識の一定の諸形態」とは、具体的には、政治的・宗教的・倫理的・美的な形態であると述べ、マルクス主義はこれらをイデオロギーと名づけるという。⁽²⁾ もちろん文学は「上部構造」の一部であり、従って社会のイデオロギーの一部ともなる。文学作品を理解しようとするなら、まず第一に、作品と作品を取り巻くイデオロギー世界との複雑で間接的な諸関係を理解しなければならない。マルクスの見解によれば、「上部構造」は「下部構造」

によって制約を受けることになるが、とすれば、「上部構造」の一部としての文学のあり方も、経済的な「下部構造」に全面的に規定されることになるのだろうか。1890年、プロッホ Joseph Bloch 宛の書簡で、フリードリッヒ・エンゲルス Frederick Engels は次のように述べている。

唯物史観によれば、歴史の決定要素は究極的には現実生活における生産と再生産です。これ以上のことをマルクスも私も主張したことはありません。従って、もし誰かがこれを歪曲して、経済的要素が唯一の決定要素だというのなら、その人は無意味で抽象的で不合理な表現に変えてしまっているのです。⁽³⁾

さらに1894年ボルギウスへの書簡でエンゲルスは次のように主張している。

政治的、法律的、哲学的、文学的、芸術的などなどの発展は、経済的発展に基づいています。しかしこれらすべてもまた相互に反作用を及ぼしあい、また経済的土台にも反作用を及ぼしているのです。これは、経済的状態が原因であり、経済的状態だけが能動的であり、他のすべては受動的作用に過ぎないということではありません。

文学は「上部構造」の一部なのではあるが、経済的「下部構造」をそのまま受動的に反映したものではない。「上部構造」の諸要素は常に「下部構造」に作用を及ぼし、しかも相互に影響を及ぼしあっている。文学も生産様式と単純な一対一の関係で係りあっているのではない。こうした基本的見解に立つマルクス主義批評は、極端な教条主義的立場と文芸社会学に限りなく近い立場との間を大きく揺れ動きながらさまざまな変奏を奏でることになる。

このような立場に接近したイーグルトンは、フランスのマルクス主義哲学者ルイ・アルチュセール Louis Althusser やその弟子ピエール・マシュレ Pierre Macherey の影響を受けながら、独自の批評理論を構築していく。イーグルトンは、従来の批評と決別して、科学的認識の地平に立った新たな批評を实践する。イーグルトンの考える批評の果たさねばならぬ機能は、作品が「必然的に自らは語り得ない（一つ一つの文字に刻まれた）作品産出の条件を明かすこと」「作品が自らに関して知り得ぬところを示すこと」⁽⁴⁾である。こうした思索の過程で生まれてきたのが、70年代から80年代半ばにかけての *Criticism and Ideology* (1976), *Marxism and Literary Criticism* (1976), *Walter Benjamin, or Towards a Revolutionary Criticism* (1981), *The Rape of Clarissa: Writing, Sexuality, and Class Struggle in Samuel Richardson* (1982), *The Function of Criticism* (1984) などの著作である。

イーグルトンがマルクス主義文学理論に接近するようになったきっかけは、1961年ケンブリッジ大学、トリニティー・カレッジに入学したことであった。同じ1961年に、後に大きな影響を

受けることになるレイモンド・ウィリアムズ Raymond Williams が、同じ大学のジーザス・カレッジに赴任し、イーグルトンは直接ウィリアムズの教えを受ける。偶然とはいえ、同じ年に、プリンストン大学高等研究センターのジョージ・スタイナー George Steiner がチャーチル・カレッジのフェローとしてケンブリッジ大学に赴任する。スタイナーは同じ1961年に、悲劇の問題を考える時避けて通ることのできない影響力を持つことになる *The Death of Tragedy* 『悲劇の死』を発表する。こうして、この年、ケンブリッジ大学でイーグルトンと悲劇との深いつながりが始まる。

イーグルトンは、恩師ウィリアムズを、「彼の仕事は個人的な経験を唯一の素材として」なされ、「その倦むことを知らぬ一途な思索の所産は、英国史上最も豊かで緻密な社会主義文芸批評といえる」⁽⁵⁾ と評価しながらも、「個人的な経験」から出発したが故に、「全ての社会構造は経験の機微にそって組み替えられることになり、把握される体制も必定あまりにも主観的たらざるを得なかった」⁽⁶⁾ と批判する。人間は各々、今この時点で新しい意味と価値を創り出すことができるという根強い信念をウィリアムズは持っている。しかし、イーグルトンは、新しい価値の創造は革命による断絶を通じて初めて可能になるものであって、この新しい価値の創造をウィリアムズは現在という一時点の所産としてしまった、と考え、ウィリアムズのこの信念をロマン主義的ポピュリズムであると批判し、その信念はリーヴィス F. R. Leavis らの『スクルーティニー』Scrutiny の流れを汲む思想だとして断罪した。⁽⁷⁾ ウィリアムズの晩年、イーグルトンは10名の論者によるウィリアムズ論を集め、論集 *Raymond Williams: Critical Perspective* (Cambridge: Polity, 1989) の刊行を計画する。刊行を待たずにウィリアムズは他界してしまい、この論集は図らずもウィリアムズの追悼号となってしまうが、この論集の「序論」の中で、イーグルトンは、ウィリアムズとの出会いから書き始め、ウィリアムズの残した主な著作を取り上げて論じ、彼の業績を高く評価している。1988年にウィリアムズが他界したあと、彼を偲んで書いたエッセイ⁽⁸⁾の中で、イーグルトンは、アルチュセール流マルクス主義の袋小路から戻ってくると、ウィリアムズの著作がいつも「そこにいて待ってくれていた」と述べている。また、2000年に上梓した *The Idea of Culture* (Oxford: Blackwell) では、第5章の‘*Toward a Common Culture*’で「共通文化論」をめぐってエリオット T. S. Eliot とウィリアムズが比較して検討されるが、イーグルトンはウィリアムズの文化論のほうを肯定的に評価している。一時はウィリアムズを批判したイーグルトンではあったが、常にウィリアムズの影響下にあったことが明らかである。それは後述するように『甘美なる暴力』の中にも見て取れる。

マルクス主義文学批評家として出発したイーグルトンであったが、1980年代半ばごろから、少しずつその関心を文学をも取り込んだ文化そのものへと広げていった。1986年に公刊された論文集 *Against the Grain: Essays 1975-1985* (London: Verso) 『批評の政治学』大橋洋一・鈴

木聰・黒瀬恭子・道家英穂・岩崎徹訳（平凡社，1986）にその間の事情が詳しい。

1970年代もその後半にさしかかると、全世界的規模の資本主義の危機が、英国のみならず世界中のいたるところで政治勢力の右傾化を生み、左翼の知的風土も、目に見えて変化することになった。このとき、アルチュセールのマルクス主義が行き詰った地点からどの先に向かうかを巡って、二つの方向に政治が分裂していったように思われる。一つは、この実用性一本やりの政治的には活力を喪失した状況のなかで、アルチュセール理論から、より「右翼的」要素を絞り出し、それをマルクス主義から引き離して、当時すでに急成長のきざしをみせていたポスト・マルクス主義的、ポスト・構造主義的思想の下位文化に組み込むことで、活路を見いだそうとするものだった。（中略）いま一つの方向とは、資本主義が危機に瀕しているこの時代、社会崩壊の広がるこの時代、激化する反帝国主義闘争のこの時代に、マルクス主義だけを唯一適切な対応であると考えマルクス主義を断固擁護することだった。⁽⁹⁾

上記二つの方向のうち、前者の道をとったのは、北大西洋条約機構と「自由世界」擁護の立場を表明したアルチュセールの弟子ミシェル・フーコー Michel Foucault、『テル・ケル』Tel Quel につどい神秘主義へ転向した連中、政治的絶望の産物である快楽主義へと走った連中、「多元化」を物神化した形式主義者たちであり、自分は後者の道をとるとイーグルトンはいう。ただし、とイーグルトンは付け加える。

この試みが、純粹かつ素朴なマルクス主義への後戻りとなることは決してあり得ないと、私は考える。他のさまざまな思想潮流に汚染されることなく超然と存在するマルクス主義など、所詮、想像的なものと判明する立場でしかない。むしろ今必要なのは、マルクス主義以外の現代の思想動向のなかからもっとも示唆的で潜在可能性にとむ側面をとりだし、それと照らしあわせて、マルクス主義を再考することなのだ。⁽¹⁰⁾

この本が試みたのは、フェミニズムや一部のポスト構造主義へとマルクス主義を開いてやり、マルクス主義理論そのものを多様化させることだった。⁽¹¹⁾

そしてこの論文集の後半ではこのようなイーグルトンの関心の変化が色濃く表れており、考察の焦点を文学テキストから現代の文化形態一般にまで押し広げて、ポスト構造主義との対話を続けている。当然彼のこの立場はこれから論じる『甘美なる暴力』にも流れ込んでいく。カトリック・アイルランド移民三世として、イーグルトンはごく初期の著作 *Exiles and Emigres: Studies in Modern Literature* (London: Chatto & Windus, 1970) からアイルランド出身の文学者に対

する関心を持ってきたが、1990年代後半のいわゆるアイルランド三部作、Heathcliff and the Great Hunger: Studies in Irish Culture (London & New York: Longman, 1995), Crazy John and the Bishop, and Other Essays on Irish Culture (Cork, Ireland: Cork University Press in Association with Field Day, 1998), Scholars and Rebels in Nineteenth-Century Ireland (Oxford & Malden, Mass.: Blackwell, 1999) では、研究の対象を文学から思想、哲学、政治、経済、歴史まで広げ、広くアイルランド文化の総体的動向を論じている。

ところで、イーグルトンにはもう一度大きな転機が訪れる。1982年に、これまで100万部売れたといわれているベストセラー Literary Theory: An Introduction (Oxford: Blackwell) 『文学とは何か 現代批評理論への招待』大橋洋一訳(岩波書店, 1985)を出版して、英文学批評の始まりから筆をおこし、現象学、解釈学、受容理論、構造主義、記号論、ポスト構造主義、精神分析にいたる20世紀の批評理論を批判的に紹介した。最終章「結び 政治的批評」で、文学批評とは政治的なものであると述べ、現代批評の中ではマルクス主義文学理論とフェミニズムが重要であると主張した。1996年に『文学とは何か』の改訂版が出版された時、イーグルトンは「新版あとがき」として新たに「文学理論の現在」と題する一章を加えて、旧版が出版されて以降のポスト構造主義の展開に対する懸念を表明した。1980年代初頭、イーグルトンには、ポスト構造主義やフェミニズムがいかにも「革命的」にみえたが、90年代にかけてのポスト構造主義は、初期の草分け的な著作群に見られた野心的大胆さや深みに欠け、「脱中心化」「脱構築」といった概念だけが一人歩きするようになったと思われるのである。改訂版と同じ時期に出版された著作が The Illusion of Postmodernism (Oxford: Blackwell, 1996) だが、ここでも、イーグルトンは、ポストモダニズムがこれまでの西洋的啓蒙主義的理念に立脚した人間の普遍性や自我を否定して、文化相対主義を主張していると言って、鋭く批判している。イーグルトンはポストモダニズムからは虚無的な懐疑論しか生まれえないと言う。80年代のイーグルトンはポストモダニズムに深くコミットしていたが、ここへ来て、ポストモダニズムから一歩退き始めることになる。このイーグルトンの新たな立場は『甘美なる暴力』で繰り返されることになる。

イーグルトンは、1964年から1969年まで、母校ケンブリッジ大学のジーザス・カレッジにリサーチ・フェローとして勤めたあと、オックスフォード大学に移り、1989年までウォッドム・カレッジにチュートリアル・フェローとして、1992年までリナカー・カレッジにレクチャーラーとして勤め、その後、セイント・キャサリズ・カレッジのトマス・ウォートン・プロフェッサー・オブ・イングリッシュ・リテラチャーとなる。2001年からはマンチェスター大学に移り、ジョン・エドワード・テイラー・プロフェッサー・オブ・イングリッシュ・リテラチャーとなる。在任中の2007年、自著 Ideology 2007年版の序文のなかで、マンチェスター大学の同僚でもある

作家のマーティン・エイミス Martin Amis の反アラブ発言をとりあげてエイミスを批判した。これが同年10月にメディアによって広くイギリス人の間に知らされるや、言論界を巻き込む一大事件に発展した。イーグルトンの批判はエイミスの父親、作家のキングスレイ・エイミス Kingsley Amis にも及んでいたために、キングスレイ・エイミスの未亡人で小説家のエリザベス・ジェイン・ハワード Elizabeth Jane Howard もこの論争に加わって、亡夫キングスレイを擁護し、イーグルトンを批判した。この事件が原因ではないであろうが、2008年65歳になったイーグルトンはマンチェスター大学から7月末までに退職することを求められた。英米の大学では教授が定年を迎えても本人が辞職を申し出ない限り大学に留まるのが通例だが、イーグルトンは退職を余儀なくされた。⁽¹²⁾ その後、イーグルトンは、ランカスター大学のディスティングウィッシュト・プロフェッサー・オブ・イングリッシュ・リテラチャーとゴールウェイにあるアイルランド国立大学のビジティング・プロフェッサーを勤め、2009年秋学期からはディスティングウィッシュト・ビジターとしてノートルダム大学に籍を置いていると伝えられている。

今、なぜ「悲劇」を論じるのか。イーグルトンは『甘美なる暴力』の冒頭にこう書き記す。

昨今、悲劇ははやらないテーマであるが、本書を書く気にさせた理由の一つはそのはやらなさにあった。⁽¹³⁾

それでは、今、なぜ「悲劇」ははやらないのか。「悲劇」がはやらない理由を求め、また「悲劇的なもの」の復権を目指してイーグルトンは、壮大な思索を開始する。その壮大さゆえに、『甘美なる暴力』は、イーグルトンの著作の中では、「もっとも捉えにくい」⁽¹⁴⁾ とか、「思考の方向がしばしば乱れる」⁽¹⁵⁾ とか、「しばしば議論が何処へ向かっているのか分からなくなる」⁽¹⁶⁾ といった批判があるものの、「イーグルトンがこれまで書いた著作のうちもっとも優れたもの」⁽¹⁷⁾ とか、「もっとも重要な著作の一つ」⁽¹⁸⁾ といった評価もあり、おおむね好意的に受け止められている。確かにこの著作は、古代ギリシャから現代に至る、実にさまざまな、悲劇作品、悲劇の思想を、百科全書的に取り上げ、論じ尽くしている。だからといって最終的にイーグルトンは彼自身の悲劇の定義を構築しようとしているわけではない。イーグルトンは *The Idea of Culture* (Oxford: Blackwell, 2000) 『文化とは何か』大橋洋一訳(松柏社, 2006)のなかで、さまざまな文化概念を紹介しながら、それぞれの限界や誤りを指摘し、それらに「死亡」を通知し、「埋葬」⁽¹⁹⁾ しているが、『甘美なる暴力』でも、第一章(「廃墟の理論」)で、イーグルトンは、60名を超える西欧世界の思想家、批評家、研究者がくだしてきた悲劇の「定義」を取り上げ、「定義」

としての限界を鋭く剔抉し、それぞれを「廢墟の理論」として葬る。取り上げられた批評家の中で、もっとも批判的に扱われているのがジョージ・スタイナーである。イーグルトンの『甘美なる暴力』そのものがスタイナー批判として書かれているといってもよい。イーグルトンがケンブリッジ大学へ入学したのと同じ1961年に、32歳の少壮の学者スタイナーは『悲劇の死』を著し、思想界に大きな影響を及ぼす。スタイナーによれば、「悲劇」は、この世には理性で捕らえられるような究極の正義など存在しない、そして、そこにこそ人間の尊厳があるとするギリシャ人的世界観によって支えられているが、合理主義と世俗的形而上学が勝利する17世紀後半以降、西洋の精神は古来の悲劇的人生感覚から背を向ける。⁽²⁰⁾ そこから「悲劇の死」が始まる。もう一つ「悲劇の死」をもたらした原因は、近代における支配的な世界観であったキリスト教とマルクス主義が悲劇的洞察に敵対的であったことである。スタイナーは言う。

悲劇はユダヤ的世界観とは無縁だ。(中略) ユダヤ主義は、宇宙と人間の状況とを支配している秩序は理性で捉えうるものだと激しいばかりに信じているのである。主のみわざは気まぐれでも不条理でもないのだ。それは、服従によって得られる明察をもって探求するならば、われわれにも十分納得の行くはずのものなのだ。マルクス主義は、正義と理性を強調する点で、きわめてユダヤ的である。そしてマルクスは悲劇という概念全体を斥けたのだった。⁽²¹⁾

こうしたスタイナーの主張にまず反対したのが、レイモンド・ウィリアムズであった。彼は1966年に、『近代の悲劇』を出版する。この著作の中でウィリアムズは一度もスタイナーに言及しないが、その主張からは明らかにスタイナーを意識していることが分かる。スタイナーにとって、「悲劇」には2つの形態、主として劇という形で実体化される「高尚な悲劇」と普通の生活で使われる「日常的な悲劇」とがあって、彼は後者の「悲劇」を黙殺して、議論を構築していく。従って、スタイナーによれば、

災厄の原因が現世のものであったり、葛藤が技術的ないし社会的な手段によって解決できたりする場合には、深刻な劇はあっても悲劇はない。離婚についての法律がゆるやかになっても、アガメムノンの運命は変わらないし、社会的精神医学はオイディプスの問題を解決してはくれない。しかし、経済関係がもっと正常になったり、鉛管工事が改良されたりしたら、イブセンの劇に現れる重大な危機のいくつかは、確かに解決できる。⁽²²⁾

一方、イブセンの「悲劇」作品をも高く評価するウィリアムズにとっての「悲劇」は、スタイナーの言うような、17世紀後半以降、世界から消えなくなってしまった「高尚な悲劇」ではな

く、また単なる王侯の死を扱ったものでもなかった。「悲劇」は、「人から省みられることもない労働環境の中で沈黙を強いられている人間」、「人間同士のかかわりの喪失」「炭鉱での災害」⁽²³⁾ などなどの日常の中で起きる。そして、ウィリアムズの「悲劇論」の中核は次のように宣言される。

もっとも深い意味における悲劇的行動とは、無秩序の存在を肯定することではなく、無秩序を体験し、理解し、そして、解決することだ。現在、この悲劇的行動は特殊なものではない。その名を革命という。われわれは、革命を必要とした現実の無秩序の中で、そして、無秩序を相手の秩序を欠いた闘争の中で、悪と苦悩を直視しなければならない。身近で直接的な体験の中でこの苦悩を知らなくてはならない。この行動のすべてに従わなければならない。悪にも、悪を相手に戦った人々にも。危機だけでなく、危機によって放たれたエネルギーにも、危機の中で学んだ精神にも。⁽²⁴⁾

ウィリアムズにとっての究極の「悲劇」とは、現実の無秩序のなかで、悪と苦悩とを体験しながら、その無秩序を解決すること、またの名を革命という行動なのだ。ただし、ウィリアムズは、疎外に終止符を打とうとする葛藤はさらなる葛藤を生むと指摘することも忘れない。そこに近代特有の「悲劇的ジレンマ」を感得しながら、イーグルトンはウィリアムズの「悲劇観」の影響のもとで『甘美なる暴力』を書き継いでいく。

もちろん、イーグルトンにとっても「悲劇」は死んでいない。そもそもイーグルトンはスタイナーをどのように捉えているのか。スタイナーはラシーヌをもって「悲劇」は完全に息を引き取ったと考えるが、イーグルトンはスタイナーがそう考えるようになった理由を次のように説明する。

ニーチェに限らず、ジョージ・スタイナーのような古典主義の擁護者たちは、近代の幕開けとともに、運命、神、英雄崇拜、神話、人間の心の暗闇の適切な理解は、偶然、暫定性、民主主義、理性、宗教的幻滅、未熟な進歩主義にとって代われ、その結果、悲劇が死滅したと考えた。しかし、彼は思想上の師匠であるフーコー同様、理性や社会的進歩といった考えにアレルギーをもち、ある種の哲学的悲観論を抱くことにおいて、十分、ニーチェ的であった。⁽²⁵⁾

さきに、イーグルトンが西欧的啓蒙主義的理念を否定したポストモダニズムを批判したと指摘しておいたが、彼のスタイナー批判も同じ立場からなされているのだ。正義と理性とを強調するがゆえに「悲劇」と敵対するとスタイナーが考えるキリスト教とマルクス主義についても、スタ

イナーの考え方は間違えているとイーグルトンは言う。スタイナーにとっては「不幸な結末」が「悲劇」のすべてなのだが、「悲劇」がなんらかの価値を体現しなければならないとすると、最悪の状況と対峙しながらも最良の状況を期待するキリスト教とマルクス主義とは「悲劇」と敵対するものではないとイーグルトンは考える。

「悲劇」の定義を下すことを志向せず、いかにしてイーグルトンは議論を展開するのか。彼自身、定義の難しさを認めている。それは「悲劇」には三重の意味があるからだという。「悲劇は芸術をさし、現実の出来事をさし、そして、世界観ないし、感覚の構造をさす。」⁽²⁶⁾ 定義を回避したイーグルトンは、各章で、「苦悩」「英雄」「自由・運命・正義」「憐れみ・恐れ・快樂」「悪」「犠牲」といった「悲劇的要素」を取り上げ、それぞれの要素の理解のされ方を論じながら、自ら名づける「悲劇の政治的研究」⁽²⁷⁾を展開する。「悲劇」といえば、狭い意味では演劇としての「悲劇」をさすことになるが、イーグルトンの論じる「悲劇」はもっと広い、いわば、「悲劇的なるもの」をさす。この著作の副題は The Idea of the Tragic であるが、従って副題の邦訳も『悲劇の思想』ではなく、『悲劇的なるものの思想』が相応しい。イーグルトンは「悲劇的なるもの」の政治的研究」に携わっていくことになる。

第1章と同じように、その他のすべての章でも、イーグルトンは「悲劇的要素」に関する実におびただしい数の論考に言及し、その一つ一つを批判していく。その過程で、イーグルトンが試みるのは、「悲劇的要素」を現在のための政治的な道具とすることである。「悲劇的要素」のなかでも長い歴史を持つ「スケープゴート」あるいは「ファルマコス」に着目する。「スケープゴート」的人物が「悲劇的なるもの」の中心をなしていることは間違いないとイーグルトンは考えるからだ。「スケープゴート」は共同体の健全性を確保するために共同体外の荒野へと追放される。自らを追放することで、「スケープゴート」としてのオイディプスは、都市国家の救済をとげる。キリストも町の外に追いやられ傷つけられる数多くの「スケープゴート」の一人である。キリストも後に復活して人類を救済する。イーグルトンは、時の権力構造からはじき出されたこのような「スケープゴート」が持つ、体制そのものを変える不思議な力に注目する。そして現代に目を移す時、イーグルトンはこう考える。

現代のスケープゴートは、それを追い出した当事者である都市国家が機能してゆくのに必要不可欠となった。現代のスケープゴートとは一握りの物乞いや囚人ではなく、汗を流す、疎外された大集団のことである。⁽²⁸⁾

イーグルトンのこの発言がウィリアムズの革命論に基づいて発せられていることは論を俟たない。さらにイーグルトンは続ける。

現状の「生」に騙されず、偽物や次善ですませず、現実という粗末な幻想におちつかず、そして、略奪された人々の耐えがたい空虚さ以外から、喜びと歡喜に満ちた存在は誕生しないという信念を貫くことである。⁽²⁹⁾

イーグルトンにとって、ここで言う「喜びと歡喜に満ちた存在」とは、もちろん、ウィリアムズに倣って言えば、「別名、革命」である。「昨今、はやらない」悲劇を取り上げて論じたのは、「悲劇的なもの」の秘めた力に気づかない今日の左翼に対するイーグルトンの苛立ちゆえである。

今日の文化左翼は革命に対する初期の情熱をほぼ完全に喪失し、あるタイプの実用主義、自由主義的な複数主義、あるいは社会民主主義に自ら進んで、あるいは、仕方なくおさまってしまっている。⁽³⁰⁾

こうしてイーグルトンは「悲劇的なものの復権」によって、社会変革と革命の後退を阻止しようとする彼の「悲劇的なものの政治的研究」を終える。

「甘美なる暴力」という表現は、フィリップ・シドニー Philip Sidney が『詩の弁護』The Defence of Poesy (1595) の中で用いた表現である。シドニーは、悲劇の効用とは、国王たちに暴君になることを恐れさせ、暴君には暴君の気質を分からせ、感嘆と憐憫の情をかき立てて、この世の不確かさと、権力の脆弱さを悟らせるものであると言い、その例として、暴君フェラエのアレキサンドロスあげる。肉親を含め無数の人々を殺戮したアレキサンドロスは上手に作られ上演された悲劇を見て、その目からおびたらしい量の涙を流したという。「悲劇の材料を作り出すことを恥じなかったこの男も、悲劇の甘美な暴力には抵抗できなかったのです。」⁽³¹⁾ 暴君に哀れを感じさせる悲劇という暴力をシドニーは「甘美な」と形容した。この表現を著作の表題として採用したイーグルトンにとっても革命という暴力は、理想を実現するための「甘美なる暴力」なのである。

イーグルトンは、かつて、「社会主義知識人のもっとも重要な仕事」とは「庇護とか恭順とかをいっさい排した共有メディアのなかで、正々堂々と、複雑な思想を分かりやすく伝えることだ」⁽³²⁾ 述べているが、この著作は彼の言う「仕事」を見事に果たしている。

確かに、この著作からイーグルトンの考える「悲劇の定義」は捉えにくい。しかし彼は「悲劇

の定義」を試みたのではない。彼が何気なく語る表現の中に、彼の本音が読み取れる瞬間がある。たとえば、イーグルトンはこう語る。

われわれが偶然性をどれほど信じていたとしても、世界にはきっと意味があると、心の片隅では期待しているはずだし、意味がないとすると、どことなく裏切られた感じがするものだ。一種の無意味である不公正にわれわれがこれほど怒るのはこのためかもしれない。⁽³³⁾

イーグルトンは意味を認めようとしないう現代の思潮に怒っているのだ。「悲劇」が混沌とした世界に何らかの意味づけをしようとする人間の崇高な行為だとすれば、イーグルトンにとって、「悲劇的なもの」の復権とは、とりもなおさず、普遍が軽んじられ、相対主義が跋扈する現代における「意味」の復権なのである。この著作の4年後、次にイーグルトンの思索の赴く先は、人生そのものの「意味」を考えようとする『人生の意味』The Meaning of Life (Oxford: Oxford University Press, 2007) である。

かつて筆者はイーグルトンの批評実践を総括して次の3点を指摘した。⁽³⁴⁾ 文学の価値や意味の問題を問うことを拒絶する現代の批評の多い中であって、イーグルトンはこの問題を真正面から取り上げているということ。イーグルトンには詩を論ずる仕事が残っているということ。イーグルトンにはその独自の立場から、「文化」の問題へのさらなる発言を期待したいということ。第一点目については、本書でもイーグルトンらしさが遺憾なく発揮されている。第二点目については、詩論 How to Read a Poem (Oxford: Blackwell, 2007) が公刊されて、懸案が解決した。第三点目についていうと、実用主義や自由主義的な複数主義に陥っている左翼に対する批判としても書かれた本書では、「現在の政治的状況の深刻さや緊急性に対処できる鋭さを、批判言語に与えようとするならば、左翼も文化的関心だけに、今のようにしつこくこだわってはいならない」⁽³⁵⁾ とイーグルトンは主張し、意識をますます先鋭化している。「意味」の問題については今後ともイーグルトンにこだわってってもらいたいし、また「文化」を超えていかに関心を広げていくか、イーグルトンを注視していかなければならない。

注

- (1) Karl Marx, A Contribution to the Critique of Political Economy (1859)
- (2) Terry Eagleton, Marxism and Literary Criticism (London: Methuen, 1976) 5.
- (3) 以下の Engels の二つの書簡については、Eagleton, Marxism and Literary Criticism による。
- (4) Terry Eagleton, Criticism and Ideology (London: Verso, 1976) 91. 『文芸批評とイデオロギー』高田康成訳 (岩波書店, 1980)
- (5) Ibid., 23.
- (6) Ibid., 26.

- (7) Ibid., 32.
- (8) Terry Eagleton, "Resources for a Journey of Hope", *The Eagleton Reader*, ed., Stephen Regan (Oxford: Blackwell, 1998).
- (9) Terry Eagleton, *Against the Grain: Essays 1975-1985* (London, Verso, 1986) 4. 『批評の政治学』大橋洋一、鈴木聡、黒瀬恭子、道家英穂、岩崎徹訳 (平凡社, 1986)
- (10) Ibid, 4-5.
- (11) Ibid., 6.
- (12) *The Times Higher Education* 21, August, 2008.
- (13) Terry Eagleton, *Sweet Violence: The Idea of the Tragic* (Oxford: Blackwell, 2003), ix, 『甘美なる暴力 悲劇の思想』森田典正訳 (大月書店, 2004)
- (14) James Smith, Terry Eagleton, *A Critical Introduction* (Cambridge: Polity, 2008), 142.
- (15) Adrian Poole, "Terry Eagleton. *Sweet Violence: The Idea of the Tragic*", *The Review of English Studies*, Vol. 55, No. 218, 107.
- (16) Thomas Healy, "Review essay", *Textual Practice* Vol. 18, No. 2, 2004, 321
- (17) Paul Dean, "Current Literature 2003: Literary Theory, History, and Criticism", *English Studies*, 2004, Vol. 4, 532.
- (18) David Anderson, *Terry Eagleton*, (New York: Palgrave Macmillan, 2004), 171.
- (19) Terry Eagleton, *Literary Theory: An Introduction* (Oxford: Blackwell, 1983), 204. 『文学とは何か』大橋洋一訳 (岩波書店, 1985) 9
- (20) George Steiner, *The Death of Tragedy* (London: Faber, 1961) 193. 『悲劇の死』喜志哲雄、蜂昭雄訳 (筑摩書房, 1979)
- (21) Ibid., 4.
- (22) Ibid., 8.
- (23) Raymond Williams, *Modern Tragedy* (London: Chatto & Windus, 1969), 13.
- (24) Ibid., 83.
- (25) Eagleton, *Sweet Violence*, 20.
- (26) Ibid., 9.
- (27) Ibid., x
- (28) Ibid., 296.
- (29) Ibid., 296.
- (30) Ibid., 295.
- (31) Philip Sidney, *The Defence of Poesy* (研究社, 1968), 60.
- (32) Terry Eagleton, *The Function of Criticism* (London, Verso, 1984), 113. 『批評の機能』大橋洋一訳 (紀伊国屋書店, 1988)
- (33) Eagleton, *Sweet Violence*, 106
- (34) 酒井正志, 「科学的地平からの革命批評 テリー・イーグルトン」, 岡本靖正・川口恭一・外山滋比古編 『現代の批評理論』第3巻 (研究社, 1988) 100 - 127.
- (35) Eagleton, *Sweet Violence*, 296.